

# 統合報告書2025-2026

GUNMA UNIVERSITY INTEGRATED REPORT 2025-2026



群馬  
大学



## 目次

04 学長メッセージ

06 群馬大学の歩み

08 数字で見る群馬大学

### I 戦略

12 価値創造プロセス

14 特集  
～本学の創出する価値～

### II 活動

22 教育

26 国際交流

28 研究

32 医療

35 地域貢献

### III 運営

38 SDGs達成への取り組み

39 環境保護の取り組み

40 ガバナンス体制

### IV 財務/基金

44 財務情報

46 共同研究・依頼分析等

47 群馬大学基金・ご寄附等

## ステークホルダーの皆様へ

日頃より群馬大学の教育研究活動に対し、ご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

群馬大学は、2023年（令和5年）、本学の起源である「小学校教員伝習所」の設立から150周年を迎えました。この間、本学は教員、医師、看護師、技術者などの養成を行う大学として、また、共同研究などを通じて産業振興の要となるとともに、先端医療を提供する中核病院を擁する地方国立大学として、地域とともに歩んできました。

このたび、本学の現状や、中長期にわたる価値創造に向けた主な取り組みについて、ステークホルダーの皆様に分かりやすくお伝えするため、「群馬大学統合報告書2025 - 2026」を発行しました。

本報告書を通じて、「知の拠点として地域の人材育成や地域社会を支える基盤となると同時に、グローバルな視点で活躍できる大学を目指す」群馬大学を、地域における身近なパートナーとしてご理解いただければ幸いです。

# 裾野の広い知が拓く 価値創造

## 共創・共生

群馬大学は地域社会や産業界とともに、新しい価値を創り出す「共創」と、互いに支え合い発展する「共生」を重視しています。多様なステークホルダーとの対話と連携を通じて、学術的成果を社会へ還元し、持続可能で豊かな未来の実現を目指しています。



## 学長メッセージ

### 知の拠点として地域の人材育成や地域社会を支える基盤となると同時に、グローバルな視点で活躍できる大学を目指して

群馬大学は2023（令和5）年に創基150周年を迎えました。これまでの長い歴史の中で、本学は時代ごとの社会の変化に柔軟に対応しながら、常に新たな挑戦を重ねてまいりました。2025（令和7）年度は、大学院組織として食健康科学研究科を新設しました。さらに、2026（令和8）年度には、情報学研究科・パブリックヘルス学環・医理工レギュラトリーサイエンス学環に博士課程を設置し、社会の多様な要請に応える教育・研究体制の充実を進めています。群馬大学はこれからも地域社会とともに歩み続け、知の創造と人材育成を通して未来を切り拓いていきます。

学長ビジョンとして掲げた「知の拠点として地域の人材育成や地域社会を支える基盤となると同時に、グローバルな視点で活躍できる大学を目指して」の実現に向け、多様化・高度化する社会の中で活躍できる人材の育成を推進します。基礎から応用、さらには先端研究に至る幅広い分野での知の発展を目指すとともに、高度医療の提供や社会課題の解決を通じて、地域の中核としての知の拠点形成を一層強化してまいります。

1949年に制定された群馬大学の徽章は、本学が上毛三山に囲まれた地に位置することを象徴しています。特に、荒牧キャンパスに最も近い赤城山は、その雄大な姿と広大な裾野をもつ山として知られています。群馬大学もまた、赤城山のように広い知の裾野を築き、その基盤の上に地域から世界へとつながる多様な知の峰を生み出し、学術と社会の双方に価値を還元することを目指しています。そして、知の集積と発信を通して、新たな価値創造により安全安心で豊かな社会の実現を推進していきます。

今後も、多様なステークホルダーから信頼される大学であり続けるために、学内外の意見を積極的に取り入れ、地域共創に貢献してまいります。同時に、知と人材が集うグローバルな知の集積拠点としての魅力をさらに高めるべく、経営基盤の一層の強化と教育・研究改革を着実に進め、社会と未来に開かれた大学を目指してまいります。

群馬大学長 石崎 泰樹



1873  
明治6年

### 小学校教員伝習所 創設（現 共同教育学部）

- 1873年 小学校教員伝習所を本庄へ移設、さらに熊谷へ移設し、暢発学校に改称
- 1876年 暢発学校は高崎（興禅寺）に移され群馬県師範学校に改称
- 1886年 師範学校令により群馬県尋常師範学校に改称
- 1898年 師範教育令により群馬県師範学校に改称
- 1901年 群馬女子師範学校設立
- 1912年 群馬県第二師範学校設立（碓氷郡安中町）、群馬県師範学校は群馬県第一師範学校に改称
- 1913年 群馬県第一師範学校・第二師範学校が合併、群馬県師範学校に改称
- 1921年 群馬県実業補習学校教員養成所設立
- 1935年 群馬県立青年学校教員養成所に改称
- 1943年 官立群馬師範学校設置
- 1944年 群馬県立青年学校教員養成所から群馬青年師範学校に改称



暢発学校校舎



群馬女子師範学校



桐生高等染織学校



前橋医科大学

1915  
大正4年

### 桐生高等染織学校 設立（現 理工学部）

- 1920年 桐生高等工業学校設立
- 1944年 桐生高等工業学校から桐生工業専門学校に改称

1943  
昭和18年

### 前橋医学専門学校 設立（現 医学部）

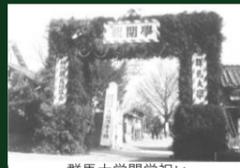
- 1948年 前橋医学専門学校から前橋医科大学に改称

#### 現在の群馬大学の始まり

1949  
昭和24年

### 群馬師範学校、群馬青年師範学校、前橋医科大学、桐生工業専門学校の諸学校を包括し、学芸学部、医学部および工学部からなる群馬大学が開学

- 1949年 医学部附属病院設置  
医学部附属看護婦養成施設設置（後の医学部附属看護学校）  
附属図書館、学芸学部分館、医学部分館、工学部分館設置
- 1951年 学芸学部附属小・中学校、幼稚園設置  
医学部附属内分泌研究施設設置（現 生体調節研究所）
- 1952年 附属病院草津分院設置（現 廃止）
- 1953年 工業短期大学部設置（旧 工学部夜間主コース）
- 1955年 大学院医学研究科設置（現 大学院医学系研究科）
- 1964年 大学院工学研究科設置
- 1965年 教養部設立  
医学部附属助産婦学校設立
- 1966年 学芸学部を教育学部に改組
- 1970年 教育学部を荒牧キャンパスに移転
- 1972年 医学部附属臨床検査技師学校設置
- 1977年 医学部附属看護学校、附属助産婦学校、附属臨床検査技師学校を医療技術短期大学部に改組
- 1979年 教育学部附属看護学校設置（現 附属特別支援学校）
- 1990年 大学院教育学研究科設置
- 1993年 社会情報学部設置
- 1994年 内分泌研究所を生体調節研究所に改組
- 1996年 医学部保健学科設置
- 1998年 大学院社会情報学研究科設置
- 1999年 留学生センター設置（現 グローバルユニシアチブセンター）



群馬大学開学祝い



医学部附属病院



医学部附属研究施設当時の研究棟



工業短期大学部



教育学部の移転（荒牧キャンパス）

2004  
平成16年

### 国立大学法人群馬大学 発足

2005  
平成17年

重粒子線医学研究センター設置  
附属図書館、医学分館、工学部分館を総合情報メディアセンターへ統合



重粒子線治療施設

2008  
平成20年

### 教職大学院設置

2011  
平成23年

### 大学院保健学研究科設置



多職種連携教育研究研修センター設置

2013  
平成25年

工学部を理工学部に改組  
大学院工学研究科を大学院理工学府に改組  
多職種連携教育研究研修センター（WHO協力センター）設置



次世代モビリティ研究の実験用車両

2014  
平成26年

### 未来先端研究機構設置

2016  
平成28年

### 次世代モビリティ社会実装研究センター設置

2017  
平成29年

数理データ科学教育研究センター設置  
食健康科学教育研究センター設置



共同教育学部設置の合同記者会見

2019  
令和元年

### ウイルスベクター開発研究センター設置

2020  
令和2年

宇都宮大学との連携による共同教育学部設置  
教職大学院（専門職大学院）改組  
ダイバーシティ推進センター設置



情報学部の設置（総合研究棟の整備）

2021  
令和3年

情報学部設置  
理工学部改組

2022  
令和4年

### アドミッションセンター設置

#### 創基150周年

2023  
令和5年

グローバルユニシアチブセンター設置  
多職種人材育成のための医療安全教育センター設置



2024  
令和6年

大学院情報学研究科（修士課程）設置  
大学院パブリックヘルス学環（修士課程）設置  
大学院医理工レギュラトリーサイエンス学環（修士課程）設置

2025  
令和7年

大学院食健康科学研究科（修士課程）設置  
コアファシリティ総合センター設置

2026  
令和8年

大学院情報学研究科（博士課程）設置  
大学院パブリックヘルス学環（博士課程）設置  
大学院医理工レギュラトリーサイエンス学環（博士課程）設置

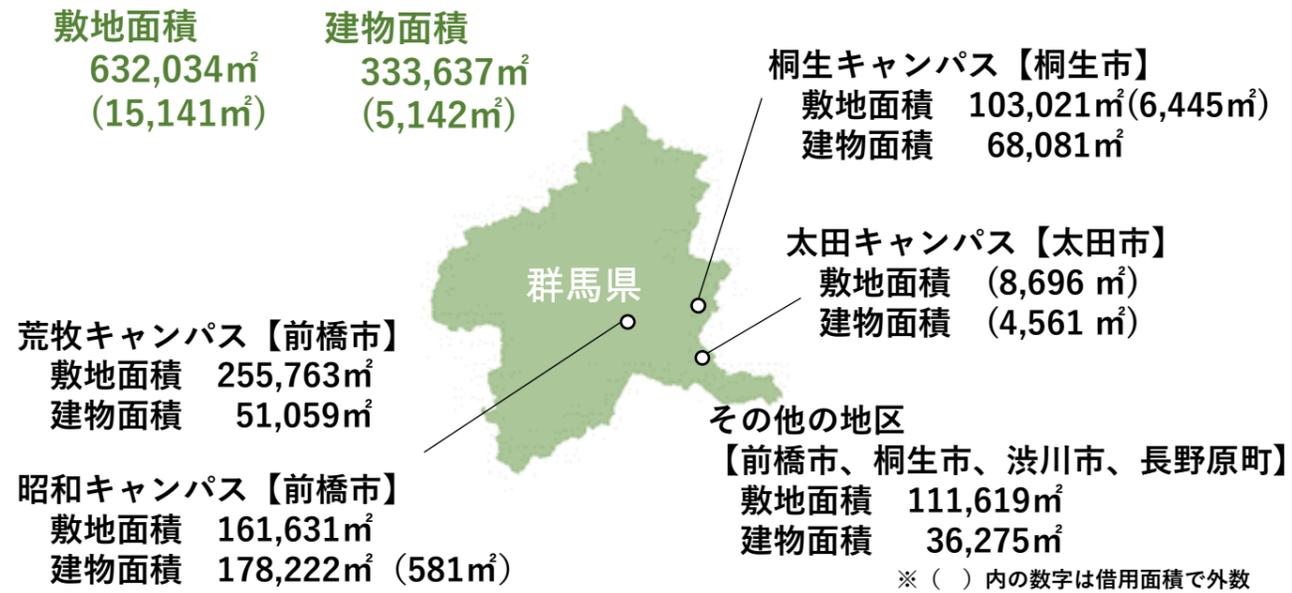


情報学研究科・学環に「博士課程」が誕生します  
2026年4月開設

# 数字で見る群馬大学 – 群馬大学基礎データ –

2025年5月1日現在

本学の規模や実態を把握するご参考にいただければ幸いです。



## 基本情報

学部数 **4**      研究科数 **8**      専攻科数 **1**

共同教育学部、情報学部、医学部、理工学部

教育学研究科、情報学研究科、医学系研究科、保健学研究科、理工学府、食健康科学研究科、パブリックヘルス学環、医理工レギュラトリーサイエンス学環

特別支援教育特別専攻科

「群馬の食は世界を目指す」のスローガンのもと、2025年4月に食健康科学研究科が誕生しました。

学生数 **7,686** 人

学部生数 5,056人	大学院生数 1,371人	専攻科生数 5人	附属学校生徒数 1,190人	聴講生等 64人
----------------	-----------------	-------------	-------------------	-------------

教職員数 **2,346** 人

役員数 6人	教員数 848人	事務職員数 348人	技術職員等数 1,144人
-----------	-------------	---------------	------------------

※非常勤は含まない

### 学部入学者出身地区別内訳数

北海道 13人	東北 52人	関東 894人	中部 143人	近畿 8人
四国 4人	中国 10人	九州 6人	沖縄 2人	その他 5人

### 医学部附属病院

診療科 30診療科  
病床数 731床  
入院患者数 206,527人  
外来患者数 415,105人



※2024年度患者数

日本全国各地から入学者がいる魅力あふれる大学です。

## 人材育成力ランキング（全国）

「地域の活性化に貢献する大学ランキング」 **1** 位

総合ランキング **4** 位

「留学生の支援に力を入れている大学」 4位  
 「キャリア教育に熱心に取り組む大学」 6位  
 「すぐれた研究を行っている大学」 8位  
 「産学連携に積極的な大学」 9位



## 新・就職力ランキング（関東・甲信越（東京除く））

知力・思考力 3位（全国20位）  
 成長力 3位（全国32位）  
 コミュニケーション能力 4位（全国36位）  
 行動力 5位（全国46位）

総合ランキング **3** 位  
 （全国31位）

出典：日経HR『日経キャリアマガジン特別編集 価値ある大学 就職力ランキング2025-2026』

## 学位授与者数 92,921人（累計）

学部 72,212人	修士 13,463人	博士 4,470人	その他 2,776人
---------------	---------------	--------------	---------------



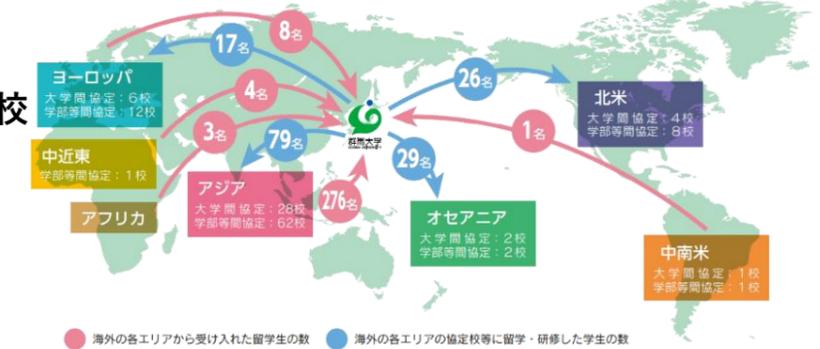
## 図書館蔵書数 607,088冊



中央図書館（荒牧） 330,929冊	医学図書館（昭和） 130,741冊	理工学図書館（桐生） 145,418冊
-----------------------	-----------------------	------------------------

## 国際交流協定数 世界31か国1地域 127校

大学間協定 41校  
 学部等間協定 86校



## 留学生数 25か国1地域292人

アジア	14か国1地域	276人
アフリカ	2か国	3人
中近東	3か国	4人
中南米	1か国	1人
ヨーロッパ	5か国	8人

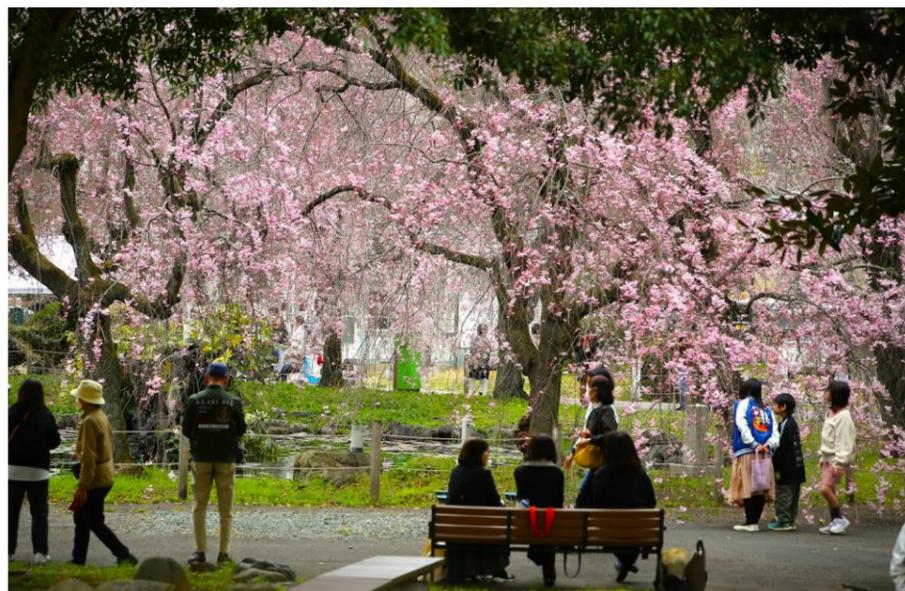
## 学生海外派遣 18か国1地域151人

アジア	10か国1地域	79人
オセアニア	1か国	29人
ヨーロッパ	6か国	17人
北米	1か国	26人

※2024年4月～2025年3月派遣

海外の大学等との学術交流や国際交流を進めることを目標とし、留学生の受け入れや本学学生の海外派遣を推進しています。

## 自然と文化が響きあう、地域にひらかれた学びの場



4月初旬、桐生キャンパスでは枝垂れ桜が春風に揺れ、新学期の訪れを告げます。地域の皆さまを招いて開かれる「枝垂れ桜を見る会」では、色鮮やかな桜の下で団子がふるまわれ、笑顔と語らいがキャンパスいっぱいに広がります。花の香りと人のぬくもりが溶けあう、美しい春のひとつときです。



ホームカミングデーに合わせ、「大学病院から発信する健康増進法：群馬県の山を歩いて健康長寿を満喫する」と題した講演会を開催しました。地域の皆様と本学の教職員が直接語り合い、ヘルスプロモーションの取り組みについて交流を深めました。

# I 戦略 Strategy





# 群馬大学の価値創造

## 群馬大学ビジョン

“地域に根差し、知的な創造を通じて、世界の最先端へとチャレンジし、21世紀を切り拓く大学へ”

### 創出価値

### 活動・成果

### 資本

#### ◇人的資本(2025.5.1現在)

- ・教職員数 2,346人
- ・学生数 7,686人

#### ◇知的資本(2025.5.1現在)

- ・4学部/8研究科等/1専攻科
- ・附属図書館蔵書数 607,088冊
- ・保有特許数 537件
- ・大学発ベンチャー企業数 11社

#### ◇社会・関係資本(2025.5.1現在)

- ・国際交流協定校 127校
- ・連携協定機関
  - 自治体 30機関
  - 民間企業 49機関
  - 大学等研究機関 61機関
  - 病院 62機関

#### ◇財務資本(2024年度決算)

- ・総資産 772億円
- ・経常収益 540億円
- ・敷地面積 632,034 m<sup>2</sup>
- ・建物延面積 333,637 m<sup>2</sup>



#### ◇教育

世界的なレベルで競争力を持ち、国内外の課題解決に貢献する未来のリーダーを育成  
▶P.22



#### ◇国際交流

異文化社会を理解し、多様なバックグラウンドを持つ人々と協働できる人材を育成  
▶P.26



#### ◇研究

学際的研究の推進によって新しい学術分野を創出し、国内外での共同研究を推進することで、地域貢献を目指しながら世界に発信する研究を展開  
▶P.28



#### ◇医療

地域に根差した高度先進医療の提供および医療教育拠点形成を推進し、地域住民の健康と福祉に寄与  
▶P.32



#### ◇地域貢献

地域における社会課題の解決のためのイノベーション・エコシステムを創出し、地域活性と地域創生を推進  
▶P.35

### ヘルスイノベーション創出

#### 健康長寿社会への貢献 ▶P.14

環境の健全性  
環境と健康をデザインする 01.

社会の健全性  
社会と人を安心でつなぐ 02.

人の健康  
健康で長く生きられる未来へ 03.

地域の知の拠点として  
イノベーションを創出し  
レジリエントな持続可能社会を  
地域と共創する

### 社会に信頼され、挑戦する大学

#### 持続的な大学価値の顕在化 ▶P.38

群馬大学ブランドの確立  
頼りにされる大学

ステークホルダーとの共創  
地域の発展を牽引する

持続的・自律的な経営  
自走する活動基盤

## 健康で幸福な 未来社会の創成



食健康科学が創出する持続可能な未来  
～ 食からはじめる、食から極める 健康で幸福な社会の実現 ～



「食健康科学」と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか。栄養学や食品開発を思い浮かべる方もいれば、健康管理や医療との関わりを連想される方もいるかもしれません。食健康科学は、これらすべてを包含し、新たな価値を創出する学問です。

群馬県は、農産物・畜産物など食品製造業が活発で、輸送機器に次ぐ第2位の製造品出荷額を占める重要産業です。この地域の強みと、群馬大学の各学部・病院・研究所の研究力を結集し、2025年4月に全国初の「食健康科学」の学位を授与する「食健康科学研究科（修士課程）」を設置しました。

食健康科学は、医科学・保健学・食品科学・食品生産工学・環境科学を基盤に、農産物の高付加価値や生活習慣病の基礎研究、予防医学的アプローチを通じ、社会課題解決に取り組む、食を通じた健康社会の実現をめざす新たな学問領域です。

本研究科は、地域産業（農林水産業・製造業・サービス産業）の生産性向上や雇用創出、文化の発展を牽引し、自治体・産業界をリードする人材を育成します。社会・産業構造の変化に柔軟に対応し、新産業の創出と雇用拡大、持続可能な社会づくりとSDGs達成に貢献します。

群馬から世界へ、食と健康の未来を拓くヘルスプロモーションを牽引

食と健康の視点から関連分野の研究を横断的かつ融合的に推進し、食健康科学の発展を目指します。

- ① エンバイロメンタルヘルス：生分解性プラスチックの開発などによる環境の健全性の向上
  - ② ソーシャルヘルス：社会の健全性の維持・向上
  - ③ ヒューマンヘルス：食を通じた疾病予防など、人の健やかな生活の支援
- 三つのヘルス（健全性）を柱としてイノベーションを創出し、地域から地球規模へと、健康で幸福な社会の実現を牽引します。これらのヘルスプロモーションを担う人材育成の中核となる「食健康科学研究科」の今後の活動にぜひご期待ください。



食健康科学研究科  
WEBサイト



地域の稼ぐ力、地元の天然由来廃棄物を使用した循環型農業モデル

しいたけ栽培後の廃菌床を再利用できないか——そんな共同研究の提案が、群馬大学の土壤改良材「GUDアグリ」開発の端緒となりました。「地域の課題を地域で解決する」という理念のもと、その共同研究の成果を発展させる形で開発が進められ、誕生したのが「GUDアグリ」です。

GUDアグリは、群馬県吉岡町の特産である舞茸の栽培過程で出る廃棄物や、町内の天然由来の廃棄物を原料として製造されている、環境にも配慮された土壤改良材です。研究の結果、この土壤改良材を用いて栽培されたお米は、カドミウム（過剰に摂取すると腎臓に障害が生じてしまう物質）含有量が低下、安全性および品質の向上が確認されました。さらに、GUDアグリを使用して栽培されたお米の一部は、国内最大規模のコンクールにおいて金賞を受賞するなど高い評価を得ており、地元

における新たな特産品としての期待も高く、人の健康と食に特化したまさに「食健康科学」の希望とも言えます。

また、吉岡町内でも同改良材を用いた米づくりが行われており、地域内での生産と消費を実現する地産地消の取組として位置づけられています。土壤改良材を開発した板橋英之教授は「地産地消を意識し、いつか給食で提供できるようにしたい」と話しています。

本事業は、地域資源を有効活用し、持続可能な農業の実現を目指す循環型農業モデルとして、今後の展開が期待されています。



循環型農業モデルについて語る板橋英之教授

産学連携が生んだ

「日本酒 緒結—おむすび—」

群馬大学の研究を、外へ



おむすび 緒結はその循環型農業モデルの先駆けとして「GUDアグリ」を用いて栽培された食用米で作られた日本酒です。お米の風味を出すためにお米自体をあまり削らず作られているため風味が豊かであるという特徴があります。

毎年収穫されるお米の味によって味わいの変わるこの「緒結」は出会いや語らいの場に寄り添い、「心を結ぶ存在でありたい」という想いを込め、株式会社結島と土田酒造株式会社とともに開発しました。



## 次世代自動車技術研究講座



### 「次世代自動車技術研究講座」とは？

**最先端の”その先”の自動車技術創出を目指し、群馬大学とSUBARUが協働して設置、運営**

「次世代自動車技術研究講座」は、2030年、さらに”その先”の時代に求められる自動車技術創出のための“イノベーション拠点”になることを目的とし、群馬大学とSUBARUが協働して太田キャンパス内に設置し、運営している共同研究講座（※）です。  
群馬大学と富士重工業株式会社（現SUBARU）群馬製作所は、2005年の包括協定締結以降、大学院連携講座や共同研究などで連携体制を構築してきました。こうした連携実績をもとに、世の中の変化や技術の進歩に合わせ、より速くより柔軟な包括的対応ができる共同研究体制とするため、さらには社会ニーズに基づく

教育プログラムを開発するため、2020年に共同研究講座を設置するに至りました。  
群馬大学とSUBARUが一緒になった基盤研究を行うことで、研究に参画する教員や学生は、課題解決の研究の推進のみならず、自動車会社の先端技術に触れ、企業の技術者と共に考え議論するなど、企業の考え方や現場を知る実践的な経験を得ることができています。  
※共同研究講座：企業等から研究資金の提供を受け、大学内に研究組織を設置する制度



### 研究内容 人々の暮らしを豊かにする、安心して楽しいクルマと社会づくり

本講座では、「もっと笑顔でもっと安心な、楽しい生活を人々にもたすクルマ」を追求し、クルマの新たな価値を創出する研究開発を行っています。  
また、群馬大学の理工系、医学系、保健学系、情報系の研究室とも連携し、SUBARUの研究課題を解決するための取組を、群馬大学-SUBARU間で戦略的、包括的、組織的に進めており、以下の3領域における研究開発に取り組んでいます。

**① 安全領域**  
死亡交通事故ゼロから、さらには究極の交通事故ゼロを目指します。様々なセンシング機能とAIを搭載する次世代車両の概念設計と社会実装を通して、もっと「安心できるクルマ」を実現していきます。

**② 感性領域**  
クルマに対して人が感じる「安心」と「楽しさ」を、設計可能な工学に結びつけていきます。乗員や交通参加者の脳が判断するメカニズムを解明し、応用研究を進めて、次世代技術として確立していきます。

**③ 設計プロセス改革領域**  
クルマのすべての設計-評価と造りこみを効率的に行うためのプロセスや手法の中で、メカニズムの解明が必要な現象や、解析や評価、予測手法等の開発を要するテーマを選出し、研究を行います。



ドライビングシミュレータ、VR表示による情報提示等の研究



ローカル5G通信網を活用した自動運転・遠隔運転技術の開発

### 本講座の今までとこれから

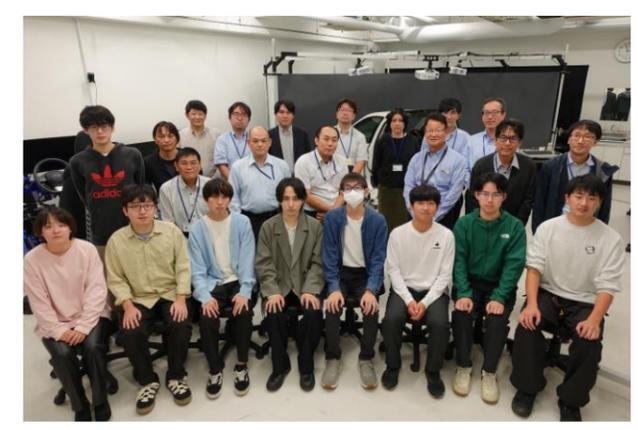
#### 変化の絶えない将来社会で、新たな価値の継続的な創造へ

第1期（2020～2022年度）は、研究講座のフレームワークづくりと位置付け、イノベーション拠点としての共同研究環境の体制整備など、運営基盤の構築を行ってきました。  
第2期（2023年度～現在）は、本格的に長期を見据えた活動を加速し、2035年に向けた研究に取り組んでいます。

これからも、次世代自動車技術研究講座は、人々の豊かな暮らしを支える、安全安心で楽しいクルマと社会づくりのため、関連する人材を育成しながら、「未来が求める自動車技術」の創出に向けて、継続して研究を続けていきます。

2025年11月現在、共同研究に参画している技術者・研究者は約340名で、群馬大学関係者は190名にのぼります。2025年度は20数テーマの共同研究が進行しており、研究URAがパイプ役となり、異なる分野と結びつけた研究に取り組んでいます。  
（例えば、医学系の研究室と連携した、死亡交通事故ゼロを目指した身体の解明に関する研究など）

本講座の岩瀬勉特任教授は、合理的な効率の追求と楽しさの両立のうえで、“できなかったことを、できるようにする”のが本講座の役割だと話します。  
変化の絶えない将来社会で、新たな価値の創造に終わりはありません。

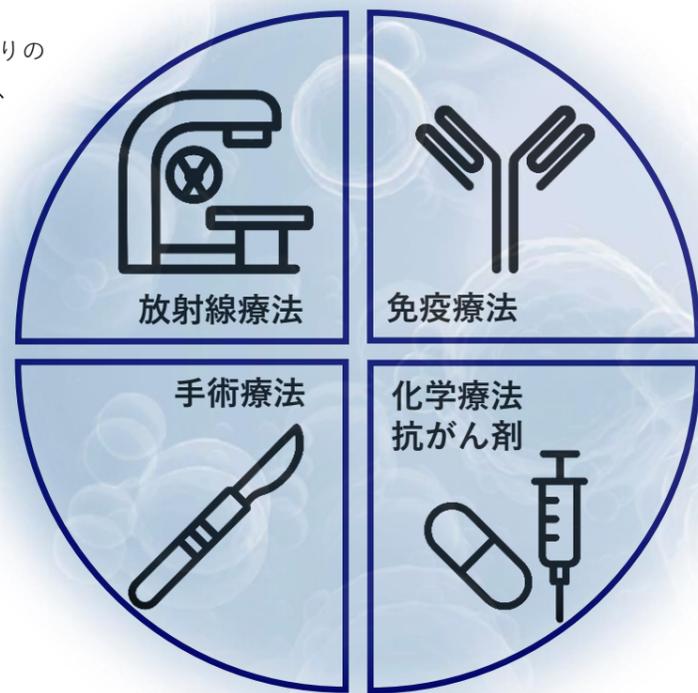


岩瀬勉特任教授（二列目右から3番目）をはじめとする研究講座のメンバー

### 重粒子線がん治療

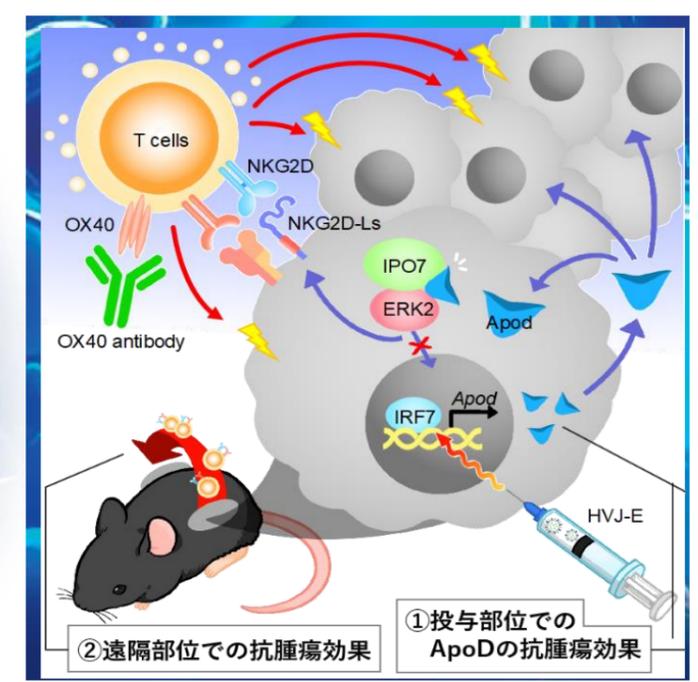
群馬大学の治療装置は、群馬県との共同事業として建設に着手し、日本で初めて大学病院に併設された施設として、2010年に治療を開始し、海外からも患者さんを受け入れています。2025年8月末までに8,362名の患者さんの治療を行ってきました。治療部位は、泌尿器のがん(前立腺がん)が約6割を占めており、肝臓がん、膵臓がん、肺がんが続きます。

放射線療法は、がんを局所的に治療する手段です。がん部位に集中的にダメージを与え、周りの正常部位のダメージを最小限に抑えることができます。群馬大学の重粒子線治療の特徴として、医学部附属病院内の他診療科・部門と連携することにより、重粒子線治療だけでなく化学療法(抗がん剤)、手術療法、一般の放射線治療など、複数の治療法を組み合わせた最適な集学的治療が実施可能です。



### 群馬発の新しい薬を

～ がんの種類を問わず、全身のがんを標的にできる可能性 ～



未来先端研究機構  
二村圭祐 教授

### 新しいがん治療に繋がる重要な研究成果を発表

未来先端研究機構は、群馬大学の先端的研究力を世界最高水準へと引き上げることを目的として、2014年4月に設立されました。「遺伝子治療学部門」では、遺伝子発現のメカニズムを解明し、その成果を活用して疾患を制御する研究を進めています。

現在の免疫療法では、個々のがんに応じた免疫を体内で積極的に誘導することができませんが、本成果はそれを可能にする新しい免疫療法の開発に繋がることが期待されます。

本部門の二村圭祐教授のグループは、体内で脂質の運搬に関わるタンパク質「アポリポタンパク質D (ApoD: アポディー)」が、がん細胞の増殖を抑える働きを持つこと、さらに、ApoDと免疫細胞の活性化を組み合わせることで、遠く離れた場所にあるがん細胞の増殖も抑える効果があることを明らかにしました。

この研究成果を医療現場へ届けるため、「IJIE (※)」の支援を受けて、新しい治療法・薬の開発を進め、全世界のがん治療に役立てることを目指しています。

近年、がんの治療法として、「手術療法」「放射線療法」「化学療法(抗がん剤)」に加え、「免疫療法」が注目されています。がん免疫療法は患者自身の免疫力を利用してがん細胞と戦う、これまでと異なるアプローチです。治療が難しかったがんに対しても効果が報告される一方、「効果が得られない人が多い」などの課題があります。

今回の発見は、がんの種類に関係なく、一部のがんに投与するだけで転移したがんなどを含む全身のがんを標的にできる可能性を秘めています。

■ プレスリリース  
(報道発表)



■ 研究活動報『水源』  
Vol.10 巻頭インタビュー



※ IJIE : Inland Japan Innovation Ecosystem  
甲信・北関東の8大学の特色ある研究成果・技術シーズに基づく起業を、地方自治体、地方銀行等との連携により推進し、地方型スタートアップ創出・成長加速エコシステムの共創を実現するプラットフォーム

### 人材育成拠点 群馬大学から世界へ

重粒子線医学センターでは、群馬県内外の医療機関と連携して、高度で統合的ながん医療体制を構築するとともに、欧米やアジアの医療機関と活発に交流し、先進的重粒子線治療の国際拠点として人材育成や共同研究を行っています。

群馬大学をはじめ、QST病院、神奈川県立がんセンターなど国内の重粒子線治療担当医の半数は群馬大学出身者、世界各地でも群馬大学出身者が若きリーダーとして活躍しています。



群馬大学で博士の学位を取得した修了生が世界中の重粒子線治療、陽子線治療施設で若きリーダーとして活躍

## 桐生キャンパスに、新たな共創の拠点「イノベーション・commons」が誕生しました



リノベーションによって生まれ変わったこの建物は、地域・企業・大学が交わる“イノベーションの交差点”。群馬大学として初の試みとなるネーミングライツも導入し、桐生キャンパス全体が新たな活力に満ちています。

すでに各種イベントや研究会が開催され、企業・教職員・学生がともに挑み、地域と共に未来を創る動きが広がっています。

## クラウドファンディングにより、医学部附属病院に「思春期ルーム」が設置されました



入院中の子どもたちにとって、遊びや学びを通じて「子どもらしい時間」を過ごせる環境はとても大切です。皆さまからのクラウドファンディングによるご支援のおかげで、プレイルームでも病室でもない「第三の場所」として、子どもたちの痛みに寄り添い、思春期の子どもたちが自由に過ごせる「思春期ルーム [Teens TERRACE]」を設置することができました。

心より感謝申し上げます。

# II 活動 Activity

## 2026年度4月から“I-GFLプログラム”が始動します

### 現代社会の諸問題の解決と、よりよい未来のために分野を超えて行動できる 未来のリーダー育成プログラム

未来のグローバル社会において学生たちがさまざまな場面で力を発揮できるよう、群馬大学では2026年4月から新プログラム「**I-GFL**（**I**nterdisciplinary Program for **G**lobal **F**rontier **L**eaders）」をスタートします。

I-GFLは多様な背景を持つ学生同士がともに日本や世界について深く学び、VUCAの時代（**V**olatility（変動性）、**U**ncertainty（不確実性）、**C**omplexity（複雑性）、**A**mbiguity（曖昧性）から連想される、複雑で予測困難な時代）において専門分野を問わずどこでも活躍できる「ユニバーサル人材」の輩出を目的としたプログラムです。

自然科学、社会科学、人文科学など、さまざまな分野の学問を横断したカリキュラムを提供し、学生は複合的な視点から課題を分析し、新しい解決策を提案する力を身につけます。これにより、社会や地域の多様な問題に対し、多角的な視野と深い理解を持つ人材の育成を促進します。

また、本プログラムの全科目は英語で実施され、国際的なコミュニケーション能力やグローバルな視野の習得を重視しています。英語による授業は、国内外の学生や教員が交流できる環境を作り出し、多文化理解や異なる価値観を尊重する姿勢を養います。加えて、国際社会での実践的な活動や協働を可能にし、多様なバックグラウンドを持つ人々と協力しながら、新たな価値やイノベーションを生み出す力を育てます。

このプログラムを修了した学生は、多様な背景と知識を武器に、自ら課題を見つけ出し、解決策を提案・実行できるリーダーとして、地域や国内外の社会で活躍していくことが期待されています。

群馬大学のI-GFLは、変化の激しい現代社会において、新たな価値創造と持続可能な未来の構築に貢献できる人材を育成するための教育プログラムです。

## I-GFLが目指すもの



- Our Mission** 世界的な視野と社会的な責任感を持ち、現代社会の諸課題の解決とよりよい未来のために分野を超えて行動できる未来のリーダーを育てる
- Our Vision** グローバルな気付き、ローカルなつながり、学際的な学びを通じ、未来の卓越した人材を育む国際的に認められた大学になる
- Our Values**
  - グローバルなマインドセットとローカルなつながり
  - 学際的な学びを通じたイノベーション
  - 倫理観の伴ったリーダーシップとレジリエンス



## 本づくりプロジェクト ～本のまちづくりによる地域貢献を目指して～

### 読み書きラボ3期生の書籍『群馬にめぶく物語』を発行 次回作の制作も進行中

群馬大学情報学部「**読み書きラボ**」では、企画から執筆、編集、イラスト制作までの本づくりの工程を学生の手で行い、卒業までに本を制作する「本づくりプロジェクト」を進めています。

「読み書きラボ」は、「本のまちづくり」による地域貢献を目指して、2022年に立ち上げられました。狙いは「読み書きを通して、人と街を豊かにすること」です。

2025年3月には、「本づくりプロジェクト」3作目として、読み書きラボ3期生が、書籍『**群馬にめぶく物語**』を完成させました。

新たな物語の創作は、きっとその土地を魅力的にしてくれるはず。そして、いざ物語の舞台へ赴いたとき、想像以上に深い心象をその景色に残せるはず。そこに住む人にとっても、物語という背景が与えられることで、もの見方・感じ方が変わるはず。

そんな物語の力を信じて、群馬を舞台にした3つの短編小説で構成されています。

それぞれの物語の舞台は「少林山達磨寺」「榛名湖」「草津・横手山」。どこも群馬を代表する観光地です。

そして、2025年12月現在は、「本づくりプロジェクト」4作目として、読み書きラボ5期生が「迷える乙女を導く群馬での出会い」をテーマにした本づくりを進めています。2026年10月の完成を目指しています。ぜひご期待ください。

書籍は群馬大学中央図書館のほか、群馬県立図書館、前橋市立図書館などで読むことができます。

読み書きラボ代表の、「インタラクティブデザイン」と「認知科学」を専門とする、柴田博仁教授は、これからの展望について、「本づくりを通して、本の新たな可能性を探りたい。制作した本を介して、人とつながりたい。そんな思いが、群馬での地域貢献につながっていくのだと信じている。いずれ、本づくりを経験した学生たちの中から、本づくりや執筆に興味を持つ人が増えてほしい。そして、プロの作家やデザイナー、編集者など、“本のまちづくり”に貢献する人材が育ってほしい。」と話しています。

情報学部読み書きラボ3期生と柴田博仁教授



書籍『群馬にめぶく物語』



宇都宮大学



群馬大学

全国初の共同教育学部 ～強みを生かした教員養成機能の強化～

両大学が力を合わせた、教員を目指す学生の教育と学校教育に関する課題の研究

群馬大学と宇都宮大学は、2020年に全国初の「共同教育学部」をスタートさせました。「共同教育学部」は、複数の大学が「共同」でつくる「教育学部」であり、両大学が力を合わせて、教員を目指す学生の教育と学校教育に関する様々な課題の研究を進めています。2024年度からは、共同教育学部になってからの卒業生が教育現場で活躍しています。

「共同教育学部」の最大の特徴は「授業の相互乗り入れ」です。大学4年間の授業の40%ほどが「相互乗り入れ」で行われ、それぞれの大学の強みを生かしたカリキュラムが両大学の学生に提供されています。両大学の授業をつないで双方向で動画と音声の生中継を行いますので、学生は他方の大学の教員と、80kmの距離を超えたやりとりができます。

さらに、合同授業では、両大学の1学年全員が一堂に会し、学生同士の交流を行っています。授業を通して、他方の大学の教員の専門分野を学べるほか、学生からは「意見交換を通じて学びを深める機会が得られた」との声もあり、両大学の学生交流が専門的な知識の深化につながっています。

また、多様な教員免許を学生が取得できる体制とできることも「共同教育学部」の強みであり、中学校10教科と特別支援学校5領域のすべてについて教員免許を取得できる、全国でも数少ない学部のひとつです。（ただし、一人ひとりの学生が取得する免許は2種類が基本です）

両大学とも、「共同教育学部」になっても、それぞれの地域に根差した大学として、子どもたちに寄り添い成長を支えることのできる教員を、地域の学校に送り出す責任を果たすという思いは変わることはありません。

宇都宮大学と群馬大学による授業・交流の様子



pickup 特別支援教育専攻

子どもたちのニーズに応じた支援・指導を学ぶ教育と全国モデルの手話通訳者養成

特別支援教育専攻では、障害に関する知識だけではなく、障害のある子どもたちとの関わり方や、そのニーズに応じた支援や指導について深く学び、技能を磨いています。共同教育学部の設置により、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱の5領域すべての免許を取得することができます。

そして、同専攻では、特別支援学校教員の手話スキル不足や全国的な手話通訳人材の不足の課題に対応するため、高度な手話コミュニケーション力を持った支援人材の育成に注力しています。

学生を対象とした「手話サポーター養成プログラム」では、厚生労働省の手話奉仕員・手話通訳者養成カリキュラムの内容をふくらませて、特別支援学校教員として手話を現場で活用できるように、課題解決型の言語活動や模擬授業を取り入れています。

社会人を対象とした「日本手話実践力育成プログラム」は、学生向けプログラムを平日夜間にリアルタイム双方向のオンライン形態で開講し、居住地や職業に関係なく受講しやすくしています。

2024年度は、両プログラム合わせて、手話奉仕員資格が取得できるコースでは54名、手話通訳者全国統一

試験受験資格が得られるコースでは16名が修了しました（社会人向けプログラム初）。

また、これらのプログラムの授業のエッセンスをオンデマンド型の公開講座として開講し、全国各地からのべ1,318名が受講しました。

2025年6月25日に手話施策推進法が施行され、第7条2において「手話の技能を有する教員が養成されるようにするための大学及び教員養成機関による取組の促進」が求められる中、全国モデルとしての役割がますます求められるところです。



特別支援教育専攻 授業の様子

pickup 附属学校園

特色あるカリキュラムの創造 ～未来を切り拓く教育活動～

本学には附属学校園として、附属幼稚園、附属小学校、附属中学校、附属特別支援学校が設置されており、地域とともに歩んできた150年の歴史を誇ります。

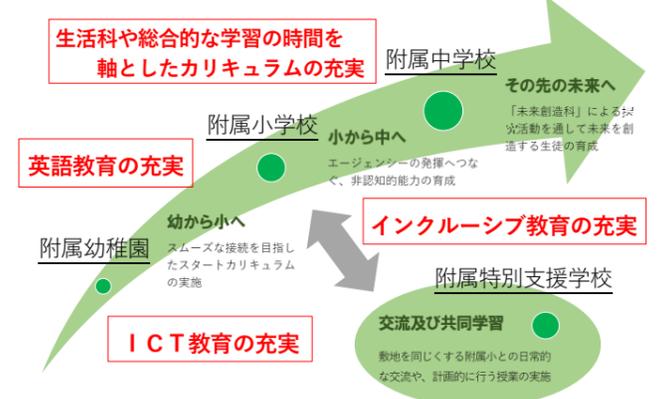
2024年度から、附属学校園を統括する組織として、附属学校部が新設され、大学・学部による附属学校園全体のガバナンスを強化しました。4つの歴史ある附属学校園が、群馬大学共同教育学部と一体となり、未来を担う園児、児童、生徒の成長と学びを支援するため新たなスタートを切りました。

また、附属学校園の校長職を県の教育委員会との人事交流により常勤とする体制とし、学校園の管理運営体制を強化し、特色ある学校園運営を実現することが可能となりました。

附属学校園は、未来を創る人材を育成する国の拠点校、地域のモデル校として、大学や県教育委員会と連携し役割を果たしていくことを目指しています。英語

やICTを活用した学び、非認知能力の育成や探究的学習の実践などを通して、世界的な視野を持って未来を切り拓く人材を育成していきます。

各学校園の特色あるカリキュラム



GFL(グローバルフロンティアリーダー)育成プログラム

国際社会において活躍する独創的なトップリーダーを育成するための特別専攻プログラム

群馬大学では、学生が国内外を問わず、多様な文化や歴史、伝統について深く理解し、グローバルな舞台で活躍できる人材育成を目指し、「GFL育成プログラム」を展開しています。このプログラムでは、異文化交流を促進するためのさまざまなイベントや、海外でも通用するより実践的な英語力の獲得のため、留学プログラムを積極的に実施しています。さらに、本プログラムの一環として、学生たちが国際交流イベントの企画・運営に携わることで、主体的に活動できる能力を養います。

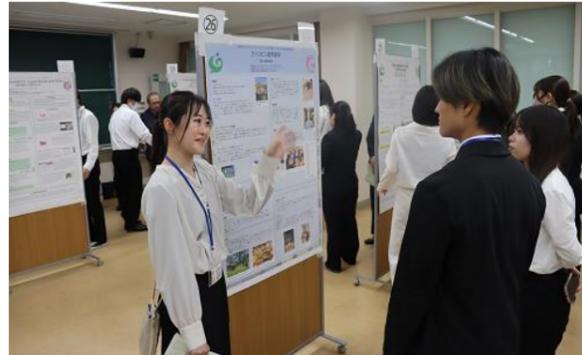
これらの活動により、英語によるコミュニケーションスキルの向上だけでなく、国内外でリーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成に取り組みます。



【各種活動】



カトマンズ大学留学(ネパール)



GFL成果報告会

留学プログラムでは現地の人々との交流や、歴史・文化体験、施設見学等を通じて、異文化理解を深めるとともに、英語コミュニケーション力を高めます。このほかにも中国やオーストラリアなど、世界各国の大学への留学プログラムが展開されており、学生は様々な文化を学び、幅広い知識を身につけます。また、年に一度各自が行った活動を紹介する場として、県内外の高校生や高等学校の教員等を交えた成果報告会を実施しています。

【学生自主企画】



Polaris(高崎女子高校共同プロジェクト)



気韻生動(日本文化体験企画)

本プログラムでは学生が様々な国際交流イベントを企画・運営し、異文化理解・異文化交流をテーマに様々な活動を実施します。イベントは本学の学生だけでなく、地域の高等学校の学生と共同で行うものもあり、大人数をまとめるリーダーとしての素養を育みます。

群馬大学 短期留学生受入プログラム

2025年サマーセッション「日本に飛び込み、群馬を探検しよう！」



(課外見学：ぐんま昆虫の森)



(藍染体験)

群馬大学グローバルイニシアチブセンターは、群馬大学への関心を高めってもらうため海外協定校の学生等を対象に「日本に飛び込み、群馬を探検しよう！(Dive into Japan, Explore Gunma!)」のテーマのもと、2025年8月25日から29日の5日間で短期学生受入プログラムを開催しました。ポーランド、ハンガリー、インドネシア、マレーシア、台湾の協定校等から、26名の学生が本学学生とともに群馬ならではの体験に取り組み、グループで分かれ主体的に考える力を養いました。5日間の体験から得た学びや気づきをもとに、「群馬」をPRするフライヤーを作成・発表を行い、プログラムを修了しました。



(書道体験)



(グループ別にフライヤーを発表)



(課外体験：こんにやくパーク)

グローバルチャレンジプログラム・トビタテ!留学JAPAN成果報告会

留学という学びを研究へ。

2025年7月14日に、「群馬大学基金グローバルチャレンジプログラム」及び文部科学省による官民協働の留学促進キャンペーン「トビタテ!留学JAPAN」に採択され、2023-2024年度に留学した5名の学生(卒業生含む)が成果を報告しました。

留学テーマは、インターネットのブロックチェーン技術(米国)、日本語教育の実態調査(ベトナム/ネパール)、最先端有機化合物技術の研究(ドイツ)、I型糖尿病の最新研究(シンガポール)、終末期緩和ケア(英国/仏国)など多岐にわたり、各学生は、留学準備、現地での専門活動、留学で得た気づき、今後の目標などを発表しました。



(報告会の様子)

## コアファシリティ総合センター(CoMTeCC)が始動します

コアファシリティにより産学の垣根を越えて研究設備を共有し、分析がつながり、大学と企業との協働のステージを提供

本学では、研究に欠かせない高度な基盤設備の集約・共用、それを支える人材育成・確保などを目的に「研究インフラの整備」に取り組んできました。しかし、食健康科学に代表される学際融合研究や、内分泌・代謝疾患研究の国際的イノベーションハブ形成など、大学の枠を超えた研究を支えるには、従来の体制では十分に対応するのが難しくなっていました。加えて、文部科学省からは「研究機関全体の研究基盤を戦略的に導入・更新・共用する仕組み（コアファシリティ化）」の強化が求められています。

そこで本学は、機器分析センター(桐生地区)と共同利用機器部門(昭和地区)両組織を統合し、基盤設備の整備と利活用を戦略的にマネジメントする新組織「**コアファシリティ総合センター** (Core facility Management and Technical Collaboration Center : CoMTeCC)」を発足させました。

センターは「エンジニアリング分野」と「ライフサイ

エンス分野」の二つで構成され、新素材・高分子開発、機能性材料評価、触媒・ナノ材料研究、さらに形態学・遺伝子解析・質量分析・サイトメトリーなど生命科学研究を推進する設備を整備しています。この組織により、本学の強みと特色ある研究や新分野の開拓を効率的に進めていきます。

また、このセンターは本学の研究を支えるだけでなく、地域との連携も大切にしていきます。すでに、企業や研究機関からの分析依頼に応じていますが、今後はさらに利用しやすい仕組みを整備し、複数の設備を活用した課題解決も支援します。お気軽にお声がけください。

さらに、「マイスター育成プログラム」により、これらの先端分析機器を使いこなす、研究・開発・地域貢献に活かせる人材を育成するプログラムも実施しております。

「群馬から新しいイノベーションを生み出す」—その拠点として、共に前進していきましょう。



### ◆エンジニアリング分野

**分析例:** ナノメートルサイズの微細構造の観察、食品や樹脂などのやわらかさや水分量それらの時間的変化、複数成分の空間分布の解明、加熱や冷却による質量・熱・変形の変化を測定・熱的特性評価

**代表的設備:** 走査型電子顕微鏡(Zeiss), 溶液核磁気共鳴装置(Bruker), 時間領域核磁気共鳴装置(Bruker), 核磁気共鳴装置イメージング(Bruker), ラマンイメージング(Oxford), X線光電子分光分析装置(Axis-NOVA), 熱分析装置一式(Hitachi)



### ◆ライフサイエンス分野

**分析例:** 農産物や畜産物、ワイン・ビール等の飲料製品に含まれる栄養成分や機能性成分の測定

**代表的設備:** 透過型電子顕微鏡(Hitachi), 共焦点超解像顕微鏡(Zeiss), 次世代シーケンサー(Illumina), ロングリードシーケンサー(Nanopore), 三連四重極型質量分析計(Shimadzu), 飛行時間型質量分析計(Sciex), フローサイトメーター(Thermo), セルソーター(Sony)

### お問い合わせ先

ライフサイエンス分野はこちら  
comtecc\_life@ml.gunma-u.ac.jp  
エンジニアリング分野はこちら  
comtecc\_eng@ml.gunma-u.ac.jp

### SimpRent

使いたい機器、やりたいことができる機器を検索できます。どなたでもご利用可。  
QRコードを読み込んで「機器を表示する方」をクリック ▶▶



## ローカル5G ~通信とDXの融合によるイノベーション創出~

リモートDXを核に、研究シーズと社会ニーズを共有し、産業界と地域との連携によるイノベーション創出と地域活性化を推進



ローカル5Gシステムとは、スマートフォンなどに使われている5G通信を、限定されたエリアで独自の5Gネットワークとして構築・運用するもので、「高速大容量」「超低遅延」「多数同時接続」を特徴とする先端通信システムです。群馬大学では理工学府を中心に、桐生キャンパスに隣接する旧中学校跡地に実験サイトを設置するなど、ローカル5G高速大容量エリアネットワークを核としたリモート技術のイノベーション創出拠点の整備を推進しています。

モビリティの遠隔操縦、ドローンの自動飛行による人や物の移動・輸送サービス、高精細画像転送技術による遠隔医療・介護支援などの行政サービス提供とDX推進

を通じた新産業創出を狙い、SUBARU共同研究講座（次世代自動車技術研究講座）との協働や、太田キャンパスと保健学研究科との連携により、LoRaWANとよばれる超低消費電力データ通信を用いて地域の学校の温度をモニタリングし、熱中症予防を図る取り組みの社会実装を進めるなど、「**リモートDXイノベーション**」を目指した様々な取り組みを行っています。

大学の総合知と産業界、地域が連携するエコシステムにより、イノベーション創出と地域活性化を推進し、多くの地方都市が抱える地域課題の解決を先導する産学官民融合拠点の構築を目指しています。



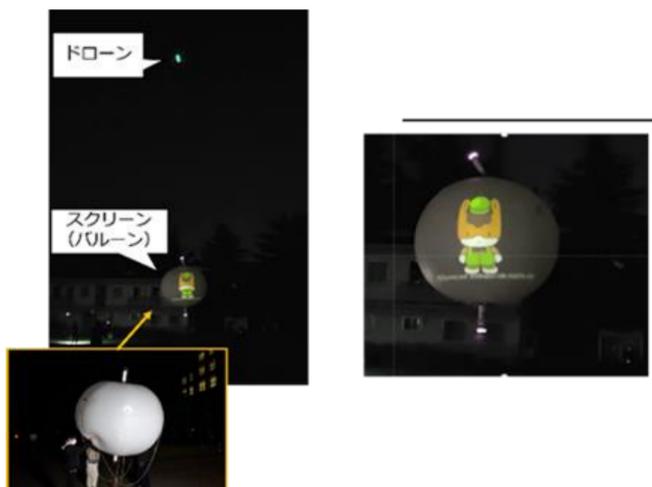
ドローンの自律飛行テスト

## プロジェクションマッピングが拓く映像の新たな価値創造

情報通信技術を活用し、医療的ケア児とその家族が社会とつながる場を提供するとともに、空間に高精細画像を映し出し、映像の新たな価値を創造



2面投影コンテンツ例（海の風景の投影）



飛翔するスクリーン(バルーン)への表示例

医療的ケア児は社会とつながる機会が限られ、日常生活に大きなストレスを抱えています。小児看護では、痛みや恐怖を和らげる「ディストラクション（気晴らし）」が重視され、近年はVRなどのICT技術で子どもの心理的適応や生活の質向上が進められています。

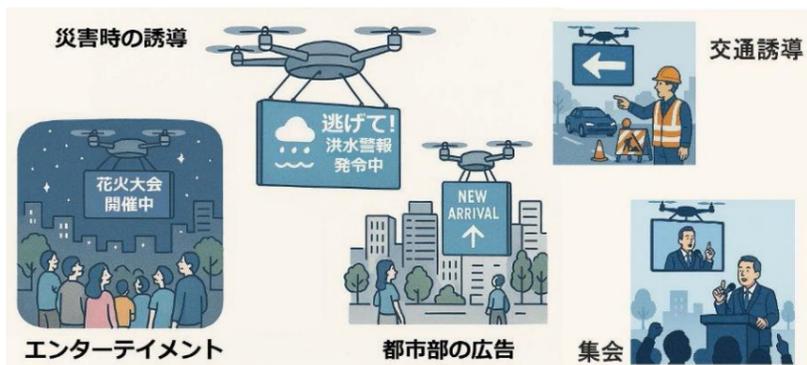
本学情報学部の奥寛雅教授らの研究グループは、旭川医科大学との共同研究により、壁と床に映像を投影して没入体験を提供する2面投影システムを開発しました。これにより、外出が難しい子どもも施設内で旅行体験などが可能になりました。さらに情報学部のPBL授業では、学生が映像内容を企画・制作し、施設で実際に投影しました。スキー場や世界旅行などをテーマとしたコンテンツは、医療的ケア児や家族から高く評価されています。

さらに、奥寛雅教授らの研究グループは、高精細な画像を空中に映し出す空中ディスプレイ技術

「HoverCanvas（ホバーキャンバス）」を開発しました。これまでもドローンに吊り下げたスクリーンへ映像を投影する技術はありましたが、レーザープロジェクターに限られ、比較的単純な映像しか投影できませんでした。今回、高精細プロジェクターの投影方向を電動回転ミラーで高速かつ高精度に制御することで、ドローンに吊り下げたスクリーンへ安定して高精細な映像を投影する新たな空中ディスプレイを実現しました。この新たな空中ディスプレイ技術は、温泉地や花火大会などのイベントでの広告・演出、道路工事での交通誘導、災害時の標識など、様々な分野での活用が期待されます。

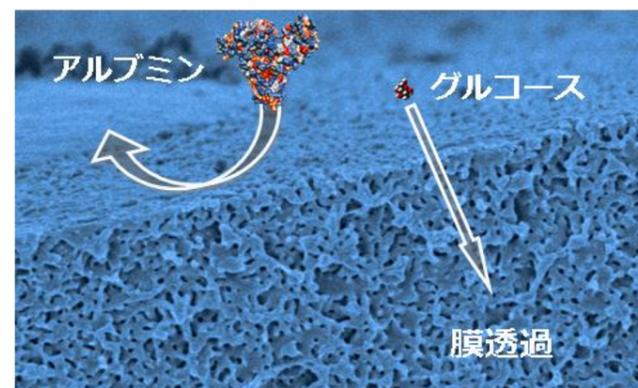


システム構成と社会実装例



## Sメンブレン ～超高性能膜が導く環境負荷の低減～

群馬大学発のSメンブレン・プロジェクトは、超高性能膜材料の独自製法による環境負荷低減と企業連携で、持続可能な社会実装を目指す



ナノ多孔膜による人工透析イメージ



UHMW-PE製大面積薄膜

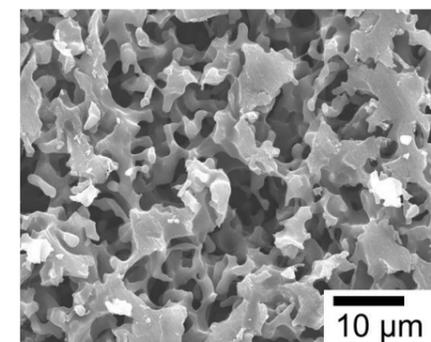
群馬大学では2017年に、世界最高水準の性能を持つ膜材料「スーパー・メンブレン(Sメンブレン)」の開発と産業応用を目指すSメンブレン・プロジェクト（代表：理工学府 上原宏樹教授）が発足しました。超高強度・超高透明・超極薄・超撥水・超絶縁・超高表面積などの優れた特性を持つ膜材料を創製し、企業への技術移転を通じた社会実装を進めています。

代表例が、リチウム電池セパレーターとして実用化されている超高分子量ポリエチレン（UHMW-PE）製多孔膜の開発です。従来の製膜法では、有機溶剤を大量に使用していましたが、群馬大学独自の「溶融延伸法」により、有機溶剤を一切使わずに、UHMW-PE製多孔膜を製造する技術を確認しました。この手法は環境負荷が低く、SDGs達成にも貢献します。

このようなナノ多孔膜は、電池材料としての応用のみならず、人工透析用の濾過膜など医療用途への応用も期待されています。また、大面積膜(1mx1m)を製造可能な延伸装置も独自開発するなど、PFAS規制を背景に、フッ素樹脂代替材としても注目されています。

一方、炭素系の多孔質膜である「シームレス活性炭」は、電気化学キャパシタ、空気電池、レドックスフロー電池用電極として優れた特性を示し、製品化に至っています。

さらに、毎年開催の「産学連携交流会」では、大学院生や若手研究者が企業と交流し、人材育成と産学連携を推進しています。国際会議も継続的に開催し、グローバルな共同研究や次世代研究者の育成を進めています。



製品化されたシームレス活性炭の電子顕微鏡写真



アキレス(株)伊藤守会長による特別講演（第5回産学連携交流会）

## カルテ共有(閲覧)による「患者参加型医療」の推進

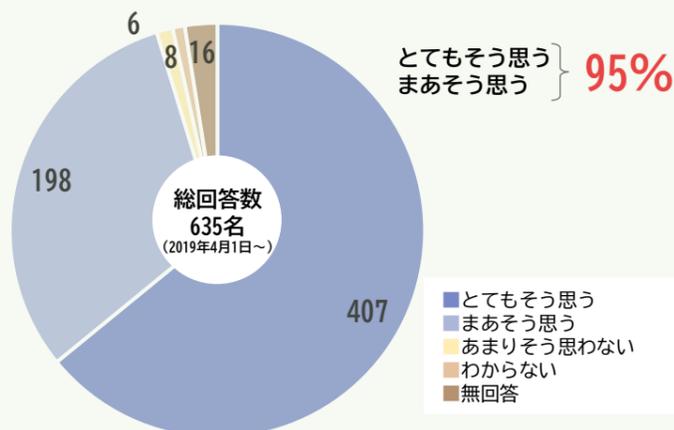
国内の大学病院の中で、病院全体としてカルテ共有(閲覧)システムの使用を推進しているのは本学のみ!

本学医学部附属病院では、患者自身が医療スタッフとともに自分の治療に参加する「患者参加型医療」の取り組みを進めており、その一環として、診療記録(カルテ)の閲覧(医療従事者と患者さんとのカルテ共有)を実施しています。この試みは、これまで行われてきた事後的なカルテ開示請求とまったく異なり、担当医からパスワードを発行してもらうことによって、これまでの検査データや画像、処方された薬など、医師や看護師と同じ情報をリアルタイムで共有(閲覧)することができる

というものです。

従来は、院内に設置されている端末からのみ閲覧することが可能でしたが、2026年1月から、医療情報管理アプリ「NOBORI」を導入し、自身のスマホからも通院履歴、血液検査、処方薬の情報を確認できるようになる見込みです。また、導入後は、カルテ記事、検査画像(放射線検査)の医療情報もアプリから見られるよう、順次機能を拡張予定です。

カルテ共有(閲覧)の仕組みは、患者さんと病院や医療従事者との信頼関係を高めるために有用だと思いませんか?



カルテ共有(閲覧)を経験された患者さんへのアンケートの結果



電子カルテを閲覧している様子

## オンライン診療システムによる県内病院間診療協力

本学が独自に開発したシステムで、医師不足の地域における診療を支援

高齢者が多い一方で医師が不足する中山間地などの医療をサポートするため、本学医学部附属病院では、独自に開発したオンライン診療システム「G-Space」(※)による遠隔支援に取り組んでいます。ICT(情報通信)技術を用いて、専門医が在籍する本院と、地域の病院を

接続することにより、CTや超音波の検査画像、カルテ、血液検査のデータなどをリアルタイムで共有し、救急医療や脳卒中、心臓病の専門医がいない地域の診断や診療の手助けをしています。

※Webカンファレンスシステム。電子カルテ・医用画像をセキュリティが確保されている状態で表示できます。Web上で、個々の患者の電子カルテの映像を共有しながら意見交換し、その検討内容を共有することが可能です。



カルテと検査データ共有

地域の病院 →



← 群馬大学

オンライン診療支援のイメージ

## ハイブリッド手術室の導入

高度かつ低侵襲な医療を安全に提供する体制をさらに強化

2025年3月、本学医学部附属病院にハイブリッド手術室が導入されました。ハイブリッド手術室は、清潔な手術室に血管造影装置を統合させたもので、カテーテル治療と外科手術を同時もしくは併用して行える施設です。これにより、手術時間の短縮や精度向上が可能になり、高度な低侵襲治療を実現します。

また、今回の導入を機に、手術室内に設置するモニターを増やし、手術室を見学する医学部生のほか、研修

医、臨床工学技士、看護師らも同時に同じ画像を共有できるようにになったことで、見学するすべての人が術者の視点で鏡視下手術の動画を見られるようになりました。ハイブリッド手術室の導入によって、患者さんの状態や本人の希望によってさまざまな選択肢が提示できるようになったほか、医学生や研修医らの教育にも力を入れていきます。



導入したハイブリッド手術室

pickup

群馬大学医学部附属病院脳卒中・心臓病等総合支援センターの公式キャラクターである“ぐんまのうしん君”が病院ゆるきゃら総選挙2025の全国決勝にて3位に入賞しました!



群馬大学医学部附属病院脳卒中・心臓病等総合支援センター



## 設置主体の異なる群馬県内病院における診療材料等の共同価格交渉に係る協定を締結

全国的にも珍しい取り組みで、スケールメリットを活かした経費削減を図る

本学医学部附属病院、前橋赤十字病院、群馬県済生会前橋病院及び群馬県病院局(県立4病院)の設置主体が異なる群馬県内の4団体(7病院)が、持続可能で良質な医療の提供というそれぞれの使命を果たすための経営基盤構築の一環として、診療材料等(※)の共同価格交渉に係る取組の連携に関する協定を、2025年6月1日付

けで締結しました。

本協定は、全国的にも珍しい取り組みであり、4団体(7病院)での共同・連携によるスケールメリットを活かした医療材料等のコスト軽減、データ分析等の管理業務の軽減・効率化を目指すことからスタートし、今後も連携病院の拡大を目指していきます。



締結式の様子

※診療材料等とは、診療材料のほか、医薬品・検査用試薬・外注検査などを指します。

将来的には医療機器の導入を目指しています。

## 多職種人材育成のための医療安全教育センターの活動

日本で唯一！文部科学省から多職種人材の医療安全教育利用拠点として認定

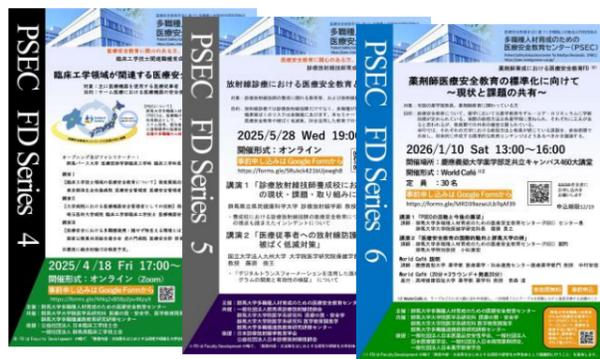
長年にわたる多職種連携教育や医療安全教育の実績を踏まえ、「医療安全教育手法に基づく多職種人材育成共同利用拠点」として文部科学省から認定されている多職種人材育成のための医療安全教育センターでは、医療職の養成機関のハブとなる教育関係共同利用拠点として、「チームワーク、リーダーシップ、システム思考、質改善といった医療安全の視点を取り入れた国際標準の医療安全教育手法」に基づいて、全国の多職種の人材育成

に関わる教員へFD（ファカルティ・ディベロップメント）を行っています。

具体的には、医療安全教育手法に関するテーマを取り上げたシンポジウムや、医療安全教育手法のFD、職種毎の医療安全教育FD、医療分野以外からのFDの実施、また、各種コンテンツの共有や講師派遣など、すべての医療者に質の高い医療安全教育を取り入れるための取組を積極的に行っています。



多職種人材育成のための医療安全教育センター



職種毎の医療安全教育FD

## 医学系研究支援プログラム

研究環境の整備を行い、医学系研究力の向上を目指す

医学系研究は、国民の健康・医療に直接的に貢献するとともに、創薬力の向上などを通じて我が国の産業競争力にも直結する重要な研究領域です。しかし、日々の診療・地域医療への貢献によって、大学病院に所属する医師は、十分な研究時間が確保できていないという課題があります。

この現状を受けて、文部科学省・日本医療研究開発機構（AMED）は、医学系研究力の向上を目的とした「医

学系研究支援プログラム」の公募を行い、筑波大学、千葉大学及び群馬大学の3大学が共同で提案した「医学系研究力向上に向けた関東三大学医学研究次世代育成プロジェクト」が採択されました。

本学は本事業において、医学系研究者が研究に専念できる環境と支援をうける体制を整備し、医学系研究力の強化を目指していきます。



## 大学からつなぐ。地域課題解決への共創

地域共創のリスタートシンポジウム

群馬大学は、2025年4月に設置した「地域共創企画室」を拠点に、自治体や産業界と連携しながら、地域課題の解決と人材育成を一体的に進める新たな体制を本格始動させました。

その第一歩として2025年10月17日、「地域の安心感の醸成」をテーマに、シンポジウムを開催しました。

基調講演では日本総合研究所の藻谷浩介氏より、「地方国立大学は地域の人・情報が集まり希望を与えるサロ

ンとなり、多様な人材がユルく繋がるのが重要」との示唆をいただきました。

会場では、学生・企業・自治体がゆるやかにつながりながら地域の未来を共に創っていく必要性が共有され、群馬大学の地域共創の取組を内外に力強く発信する機会となりました。



## 科学で地域とつながる1日

地元住民×大学教員がつながるサロンへ

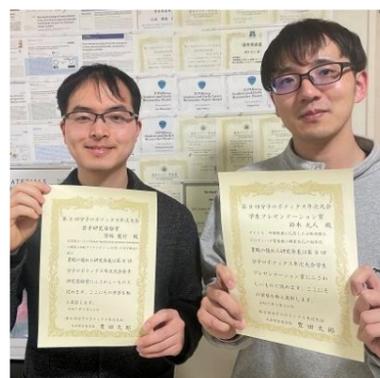
2025年10月19日に「群馬大学アカデミックデイ in 嬬恋」を開催しました。群馬大学の研究者が、環境問題、健康、情報通信技術などをテーマに、研究内容を分かりやすく紹介するとともに、ポスター展示や参加者との懇談会、ワークショップを通じて、研究が私たちの暮らしや地域社会とどのようにつながっているのかを共有しました。

サロン形式で地域の皆様に大学の最先端研究を身近に感じていただく貴重な機会となり、研究者と地域住民が対話を重ねながら、科学を通じた新たな気づきやつながりが生まれました。

このような取り組みを通じて、群馬大学は地域課題の解決に向けた産官学連携と共創の輪を今後も広げていきます。



未来を拓く若き知性 — 学びが実を結び、学会で輝く学生の挑戦



学修者本位の教育を軸に、探究心と創造力を磨き上げた成果が実を結び、学会発表や論文において輝かしい受賞実績を重ねています。学生たちの挑戦は新たな発見と成長を生み出し、未来の価値創造への貢献が期待されています。



Ⅲ  
運営  
Management

SDGsに関連する群馬大学の取り組み



群馬大学環境報告書2026



## 大阪・関西万博にも採用された群馬大学発の「減CO<sub>2</sub>(ゲンコツ)ブロック」

「減CO<sub>2</sub>(ゲンコツ)ブロック」は、群馬県内の間伐材を粉碎した木のチップをモルタルと混ぜてつくった、環境にやさしい舗装材です。群馬大学と前橋市の企業が共同で開発したこのブロックは、木が光合成によって吸収した二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を腐食せずに内部に固定し、1枚あたり約1000リットルのCO<sub>2</sub>を削減する効果があります。廃材や間伐材を再利用している点でも、資源を有効に活用する循環型社会の実現に貢献しています。

また、地元の木材を使い、地域で生産・施工できるため、輸送に伴うエネルギー消費を抑え、地域の雇用や経済の活性化にもつながります。機能面では、水を通しやすく保水力があり、打ち水効果によって夏の暑さをやわらげ、快適なまちづくりを支えます。さらに、滑りにくく安全で、雑草やにおいの発生も抑えることができます。

環境保全や地域資源の活用、安全で快適な暮らしの実現を支えるこのブロックは、SDGsの「気候変動への対策」「住み続けられるまちづくり」「つくる責任・つかう責任」に貢献する、身近で実践的な価値創造の取り組みです。

このSDGsの取り組みが評価され、大阪・関西万博のドイツ館のアプローチの舗装にも採用されました。



大阪・関西万博  
ドイツ館の舗装

## 未利用資源のGX(グリーントランスフォーメーション)の取り組み

群馬県は農業・畜産・森林資源が豊富で食品関連産業が盛んな一方、そこから生じる「残渣」など未利用資源が廃棄されています。本学はこれらを活用し新産業を創出するため、エネルギー変換技術、持続可能な地域社会づくりを進め、地域資源循環支援拠点「G-C<sup>2</sup>REATE (GX拠点)」の設立を目指しています。

G-C<sup>2</sup>REATE (GX拠点) では、以下の3つの取組を推進しています。

- ①DXを用いた未利用資源・小規模エネルギーの回収手法の確立
- ②資源を高付加価値素材や燃料、電力・ガス・燃料へ転換する技術の開発
- ③得られたエネルギーの高効率利用技術の開発

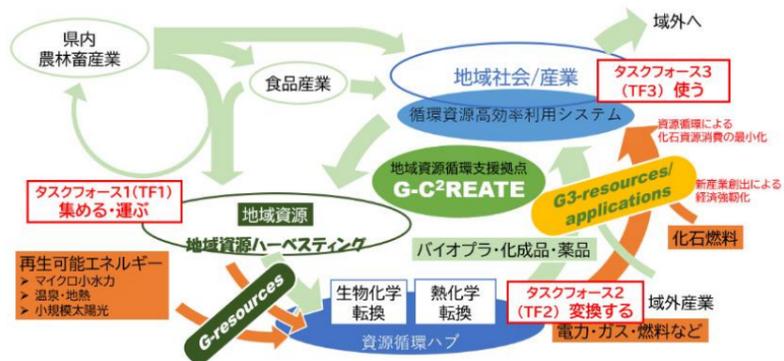
本取組は群馬県の助成事業に採択されており、3年間でGX拠点を設立し、未利用資源の活用による脱炭素化と新産業創出を通じて地域産業の強靱化を図ることを目指します。



太陽光発電エネルギーのMAYU走行



アンモニアによるエンジン発電



## 建物・設備の省エネルギー化の取り組み ~環境配慮型キャンパス整備~

【省エネルギー建物】省エネルギー化・ランニングコスト削減等による環境配慮型の設計を重視し、建物の省エネルギー性能評価によるZEB(ゼブ)化を推進しています。2025年度は、桐生キャンパスの共創型建物(6号館)の全面改修工事により、『ZEB Ready』相当の省エネ効果がある建物として整備し、標準的なエネルギー性能基準値の50%以下にリニューアルしました。



『ZEB Ready』相当の省エネ効果がある  
桐生キャンパス 6号館

【太陽光発電電力の利用】本学では再生可能エネルギーの利用として、太陽光発電した電気の利用、太陽熱集熱パネルによる給湯への熱利用を行っています。近年、荒牧キャンパスの研究棟屋上に太陽光パネルを増設するなど、再生可能エネルギーの活用を進めています。大学全体で1年間338,628 kWhの発電により一般家庭51世帯分のCO<sub>2</sub>排出量削減に貢献しています。



荒牧地区



桐生地区



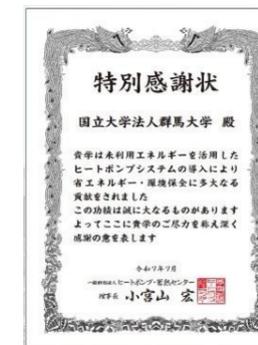
昭和地区

【LED照明への更新】照明設備の省エネルギー化のために、毎年度計画的にLED照明へと更新を進めています。2024年度は、計922台を実施しました。LED照明への更新により、光熱費は年間約100万円の削減が見込まれます。CO<sub>2</sub>排出量は年間約15トンの削減になり、一般家庭4世帯分に相当します。



LED照明へ更新した荒牧キャンパス講義室

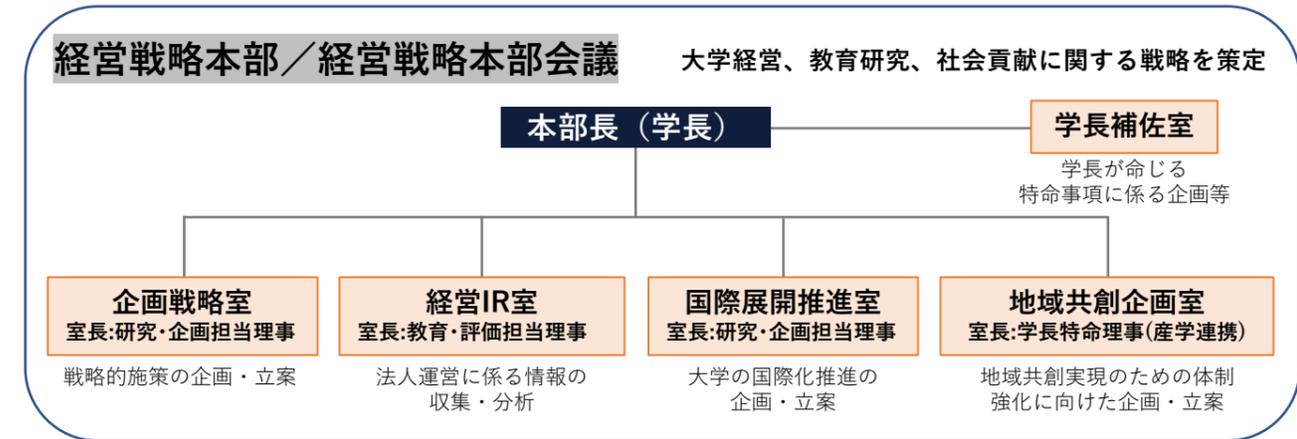
【特別感謝状】医学部附属病院がある昭和キャンパスにおいて実施しているESCO事業(※)の「未利用エネルギーの活用」が評価され、2025年度に一般社団法人ヒートポンプ・蓄熱センターより「特別感謝状」を受賞し、盾を贈呈いただきました。



※ ESCO (Energy Service Company) 事業とは、省エネ改修にかかる経費を光熱費の削減等で賄うエネルギーサービス事業です。



## 経営戦略機能の強化によるマネジメント



群馬大学では、大学の重点戦略課題に機動的に対応するため、2016年9月に学長の下に「企画戦略室」を設置し、組織再編を中心とした大学改革を進めてきました。

さらに、2022年3月には、人事・予算を含む法人運営に関する戦略的施策の策定を目的として、学長を本部長とする「経営戦略本部」を立ち上げ、迅速な情報分析と意思決定を可能にする体制を整えました。

経営戦略本部は、戦略的施策の企画・立案を担う「企画戦略室」、法人運営に係る情報の収集・分析を担う「経営IR室」、大学の国際化推進の企画・立案を担う「国際展開推進室」、地域共創実現のための体制強化に向けた企画・立案を担う「地域共創企画室」、学長が命じる特命事項に係る企画などを担う「学長補佐室」により構成され、その中核に会議体として経営戦略本部会議を設置しています。

経営戦略本部は、学長および学長が指名する理事ならびに学長が指名する者によって構成され、組織の機動性を維持するため、適切な人員配置を行い、構成員の人数も必要最小限に限定しています。

経営戦略本部会議では、目標・戦略の実現に向けた将来構想や、学内資源の戦略的な配分などについて、所轄部署のみならず、全学的な観点から協議を行っています。協議の結果、具体的な施策は担当理事の下で実行され、重要な施策については役員会などでの審議を経た後に実施される体制となっています。

本学では、これらのガバナンス体制を含め、「国立大学法人ガバナンス・コード」の全ての原則に対する適合状況を毎年公表しており、健全で信頼性の高い大学経営に努めてまいります。

ガバナンス・コードの詳細はこちら



## 役員紹介



**学長**  
石崎 泰樹  
Ishizaki Yasuki



**理事・副学長**  
(教育・評価担当)  
飯島 睦美  
Iijima Mutsumi



**理事・副学長**  
(研究・企画担当)  
花屋 実  
Hanaya Minoru



**理事・副学長**  
(総務・財務担当)  
事務局長  
坂本 淳一  
Sakamoto Junichi



**理事**  
(病院担当)  
附属病院長  
齋藤 繁  
Saito Shigeru



**理事(非常勤)**  
(学長特命(男女共同参画・ダイバーシティ))  
五十嵐 優子  
Igarashi Yuko



**理事(非常勤)**  
(学長特命(産学連携))  
近藤 潤  
Kondo Jun



**監事**  
長谷川 健  
Hasegawa Takeshi



**監事(非常勤)**  
丸山 和貴  
Maruyama Kazuki

## 大学経営を支える副学長、学長特別補佐

近年、国立大学を取り巻く環境はますます厳しさを増しており、大学経営の高度化・複雑化が進む中で、大学執行部の果たす役割は一層大きくなっています。そこで本学では、経営人材育成方針に基づき、4名の副学長と7名の学長特別補佐を配置し、法人の長である学長を補佐するとともに、重要施策の企画・立案・推進、専門的知見に基づく助言を行う体制としています。

副学長は、それぞれの任務において、大学の発展に向けた施策を牽引しています。

学長特別補佐は「群馬大学将来像」の策定や、経営戦略本部の下の各室における副室長として戦略的施策の検討に携わるなど、大学の機能強化を推進し、大学経営を支える役割を担っています。

### 副学長

アドミッション・ヘルスプロモーション担当

グローバルイニシアチブ担当

ダイバーシティ担当

教養教育担当

### 学長特別補佐

大学の機能強化(ビッグデータ活用)

大学の機能強化(教学マネジメント)

大学の機能強化(コアファシリティ、大学院改革)

大学の機能強化(社会課題解決型研究支援)

大学の機能強化(食健康科学推進)

大学の機能強化(創発的研究支援)

大学の機能強化(地域共創企画)

## 人の移動の歴史をたどる、荒牧キャンパスの風景



群馬大学馬術部は、創部以来半世紀以上にわたり活動を続ける、群馬県で唯一の大学馬術部です。これまで数多くの大会で優秀な成績を収めるとともに、地域の馬術文化の発展にも寄与してきました。現在も、学内外から集う学生が馬術を通じて交流を深め、伝統を受け継ぎながら新たな歴史を築いています。長年にわたり培われたその歩みは、本学の学生文化を象徴する存在となっています。



馬術部の馬場からほど近いエリアに、世代モビリティ社会実装研究センター（CRANTS）があり、自動運転の研究開発と社会実装を推進しています。このセンターでは、安全で持続可能な次世代モビリティの実現に向けた取り組みが日々進められています。

荒牧キャンパスを歩くと、馬から自動車、そして自動運転へとつながる、人類の移動の歴史とモビリティの進化、過去から未来への連続性を肌で感じ取ることができます。



# IV 財務 基金

Finance / Fund

## 国立大学法人会計

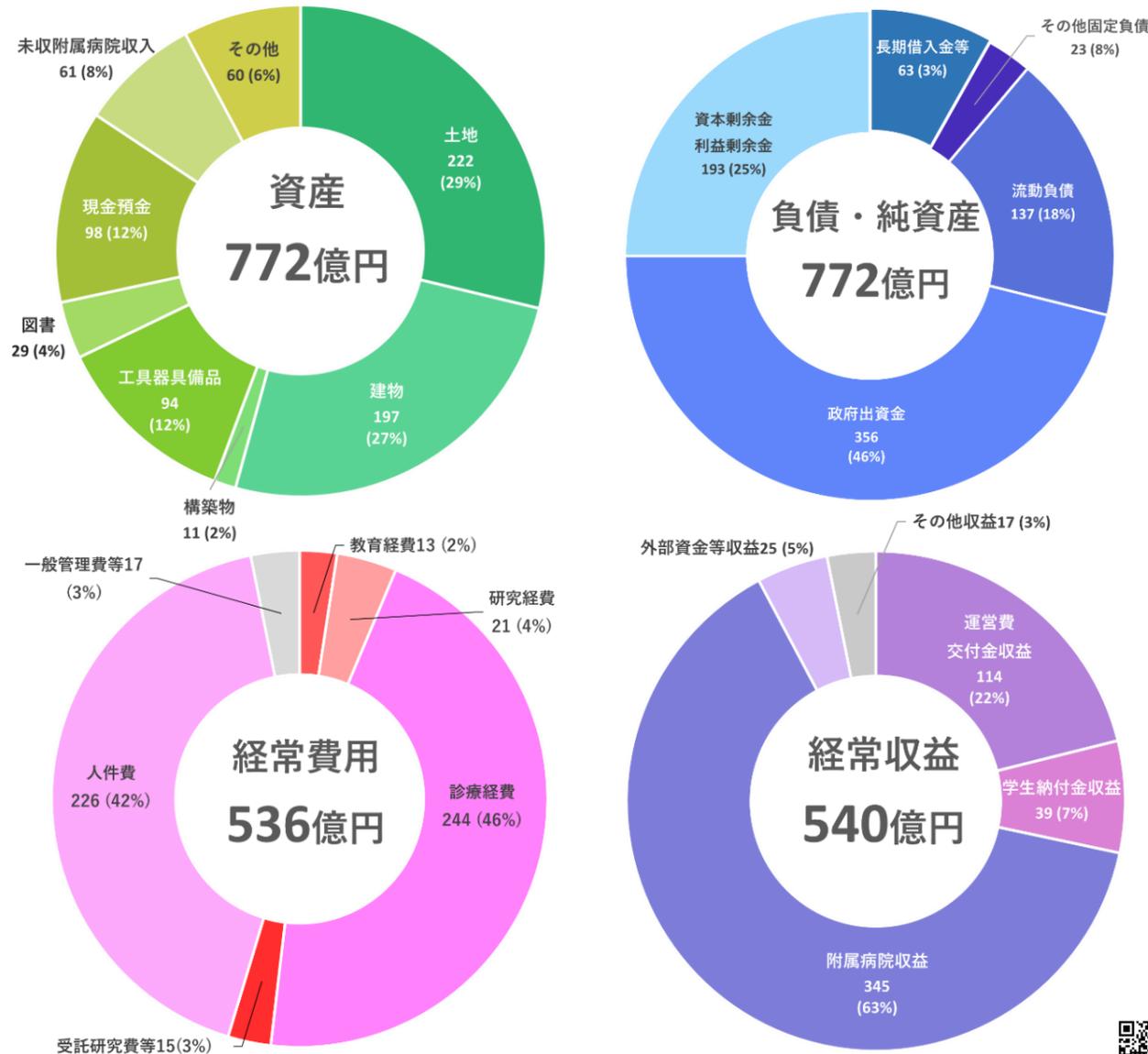
国立大学法人会計は国立大学の法人化により生まれた会計制度です。国立大学の特性を考慮して企業会計に準じつつも、企業会計では見られない、独自の会計処理を取り入れたものになっています。

国立大学法人は、公的資金をもとに運営されており営利を目的としていないため、収支の均衡を重視します。また、運営費交付金、授業料、寄附金、補助金などは教育研究等の業務を実施する義務があることから、受領した際に債務（負債）に計上し、その後、業務実施に伴い収益に替える会計処理をします。

	国立大学法人会計	企業会計
目的	教育・研究などの公的目的	利益を出す営利目的
会計の役割	公共性の説明	会社の経営成績の把握・報告

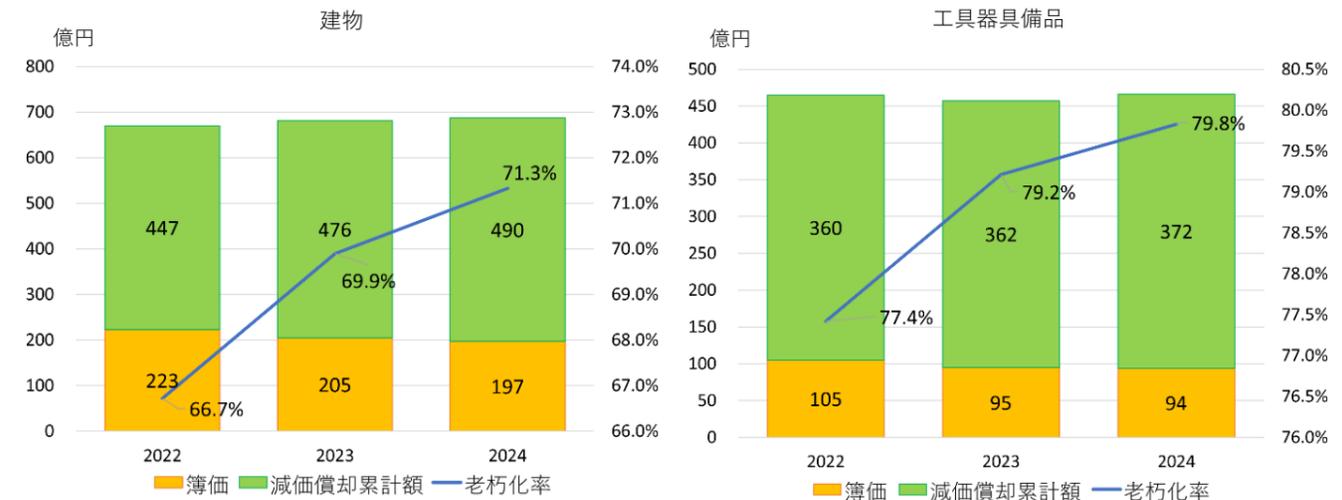
## 群馬大学の運営状況

2024年度の決算日（3月31日）における財政状況及び一事業年度（4月1日～3月31日）の運営状況を報告します。より詳細な財務情報については、本学のホームページで公表されている財務諸表をご覧ください。



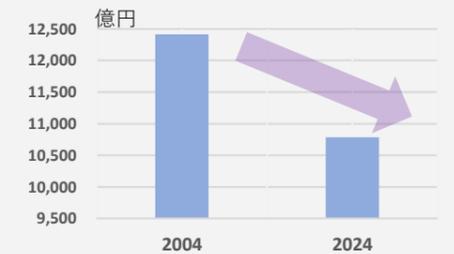
## 大学の設備

教育、研究活動を維持・発展させていくためには既存の設備の更新及び新規設備の導入も必要ですが、グラフを見てもわかるように十分な予算措置ができないまま建物・設備の老朽化が進んでしまっています。

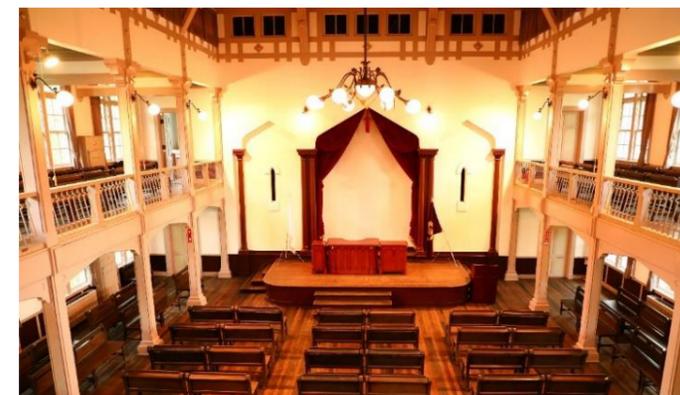


### 国立大学全体の運営費交付金

2004年の法人化以降、運営費交付金は大幅に減少しています。このように、業務運営の基盤となる運営費交付金の削減に伴い、自主的財源の確保や資産の効率的な運用に努めています。



## 施設の積極的な活用



【桐生キャンパス：同窓記念会館 ほか】

- ・TBSテレビ系列ドラマ「海に眠るダイヤモンド」
- ・映画「AWAKE」

【昭和キャンパス：病院並木道 ほか】

【荒牧キャンパス：大学会館「アザレア」ほか】

各キャンパスにおいて様々な撮影実績があります。



学内施設の利用について



群馬大学財務情報

共同研究・受託研究・依頼分析・学術指導



共同研究

民間企業等外部の機関と共通の課題を共同又は分担して行う研究をいいます。共同研究で発生した知的財産権は、原則共有となります。

共同研究講座として大学内に研究組織を設置し、包括的な共同研究サポート体制を構築することも可能です。



依頼分析

民間企業等学外機関の皆さまが抱える商品開発・品質管理・不具合原因調査などの課題に対し、コアファシリティ総合センターが先端分析装置と専門技術を活用して、課題解決を支援します。

1件の依頼につき1契約とし、本学から知的財産権を求めことはありません。



受託研究

民間企業等外部の機関から委託を受けて実施する研究、調査、分析及び検査等をいいます。

受託研究で発生した知的財産権は、本学の帰属となります。



学術指導

外部の機関及び個人等の依頼者からの依頼を受け、教育研究、技術上の専門知識に基づき、技術指導、監修、コンサルティングなどの指導助言を行い、依頼者の活動を支援します。

受入件数

	■ 共同研究	■ 受託研究	■ 学術指導
2023年度	249件（うち、群馬県内中小企業30件 大企業23件）	142件	15件
2024年度	235件（うち、群馬県内中小企業34件 大企業17件）	129件	28件

産学官連携ワンストップサービスオフィス

地域の皆様との産学官金連携に係る総合的な窓口として「産学連携ワンストップサービスオフィス」を設置しています。産学連携についてのお問合せ先がご不明の場合は、お気軽にご連絡ください。

例えば…

- 大学の研究設備を用いて共同研究を行いたい
- 商品開発に生かせる研究テーマに興味がある
- 自社研究テーマに合致する先生の話を知りたい
- 自社製品の科学的根拠を知りたい
- どこに相談すればよいかわからない

産学連携ワンストップサービスオフィス  
までご相談ください。  
✉ : onestop@ml.gunma-u.ac.jp



コーディネーターがお話を伺います。  
ご相談内容にどのような課題があるか一緒に考え、  
課題解決の糸口を見つけます。

特定の分野に留まらず、  
大学全体で課題解決に適切な教員を検討し、  
教員との面談を設定します。

マッチングが成立した場合、  
内容に応じた契約手続きを行います。

熱泉 – 共創のための群馬大学研究ガイド –

群馬大学の全研究者（研究室）の研究概要を掲載した研究者情報集を公開しています。ぜひご覧ください。



群馬大学基金



基金を活用した事業（2024年度）



学生の修学支援

経済的困窮学生に対する修学支援

- 大学院生へ奨学金を給付 留学費用補助
- ポーランド平和学習プログラム
- ウーロンゴン大学短期英語研修



大学運営全般

グローバルチャレンジプログラム  
➢ 学生が自ら企画したユニークで個性ある海外での活動を支援



ウクライナ学生等受入支援

ウクライナ情勢を受けて避難した学生、研究者の教育研究活動の継続のため、生活支援及び日本語学習支援等を実施

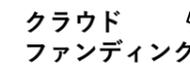
税制上の優遇措置について

- 個人寄附の方は、寄附金控除の対象となります。
- 法人寄附の方は、全額損金算入が認められています。

詳細はホームページをご覧ください。



クラウドファンディング・ご寄附



クラウドファンディング

教育、研究、社会貢献、学生の課外活動等の更なる推進のため、クラウドファンディングを活用したプロジェクトを実施しています。



個別の寄附

学術研究や奨学を目的としたご寄附を広くお受けしています。研究者を指定すること、寄附により大学内に新たな講座を設置することも可能です。

クラウドファンディングプロジェクト

- 2026/1-4 医療の「これから」をみんなで支える。群馬から未来の外科医を育てよう
- 2023/2-3 入院する子どもたちが自分らしく過ごせる場所を思春期ルーム設置へ！
- 2021/10-12 小児重症心不全患者を救いたい！超小型人工心臓の開発

詳細はホームページをご覧ください。

クラウドファンディング



個別の寄附





群馬大学

### 表紙の題字「群馬大学」：星野富弘氏 筆

本学教育学部卒業生で詩画家。1970年に中学校教諭としてクラブ活動の指導中に頸髄を損傷され、医学部附属病院に9年間入院・加療されました。その間、口に筆をくわえて詩画の制作を始め、「生きることのすばらしさ」や「生きる勇気」を与えてくれる数々の詩画作品を生み出されました。2011年には、本学における学術・文化・社会貢献などの活動において顕著な功績があった卒業生として「群馬大学特別栄誉賞」を授与。本学に寄贈された詩画作品は、現在も病院内に展示されています。また、2023年の本学創基150周年記念事業に際しても、多大なるご協力を賜りました。2024年4月にご逝去されました。

## 群馬大学 統合報告書 2025-2026

GUNMA UNIVERSITY INTEGRATED REPORT 2025-2026

統合報告書2025-2026作成チーム

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地

TEL : 027-220-7111 (代表) Mail : s-public@ml.gunma-u.ac.jp

2026年2月 発行

Web版 統合報告書

